

学術論文

アメリカ映画「ザ・コーヴ (The Cove)」を  
めぐる英語の言説の批判的分析  
— 英字新聞・雑誌の論調にみられる「イルカ・イデオロギー」、  
すなわち「価値観」の植民地主義 —

溝上 由紀

A Critical Analysis of English Discourses about an American film 'The Cove':  
'Dolphin Ideology', or Colonialism of 'Values' Underlying in the Discourses  
of English Newspapers and Magazines

Mizokami Yuki

1. はじめに

日本の和歌山県太地町のイルカ漁を題材にしたアメリカ映画「ザ・コーヴ (The Cove)」は、2009年1月に、第25回サンダンス映画祭で観客賞を受賞し、さらに、2010年3月に、第82回アカデミー賞で、長編ドキュメンタリー映画賞を受賞した。写真家レイ・シホヨスの監督によるこの映画は、かつて1960年代に、アメリカの人気テレビドラマシリーズ「わんぱくフリッパー」に出演したイルカの調教師であり、現在は、イルカ解放運動を始めとする動物愛護運動の活動家であるリック・オバリーを中心とする撮影隊が、太地町に潜入し、イルカ漁を隠し撮りしたドキュメンタリーである。捕鯨発祥の地とされ、約400年前からイルカ漁を行い、イルカ肉を食べる伝統を持つ太地町で行われているのは、何艘もの船を使ってイルカを入り江(cove)まで追い込んで捕獲する「追い込み漁」で、映画では、入り江に追い込んだ後、イルカを銚で突き刺して仕留める漁の方法が、「残酷」であると告発される。同時に、映画では、イルカは知能が高く、殺すべきでないことや、世界各地の水族館で行われているイルカショーは、虐待に当たること、イルカ肉には水銀が多く含まれ食用に適さないこと、またイルカを保護の対象にしない国際捕鯨委員会(IWC)の問題点が指摘される。言わば、反イルカ漁・反イルカ食を明確に訴える映画である。

本論文は、世界中で配信された英文メディアの記事における、映画「ザ・コーヴ」の語られ方について批判的に分析するものである。本論は、映画そのものについての論評を行うもので

はなく、あくまでこの映画について英語で語られた言説を分析し、その言説を支えているイデオロギー構造を明らかにするものである。ここで扱う英文記事は、日本や南アフリカ共和国など欧米以外の国で配信されたものも少数含まれているが、大多数はアメリカ、カナダ、英国など欧米の英語圏の国々で配信されたものである。よって、大半の記事は、欧米の英語のネイティブスピーカーの書き手が、英語話者に向けて書いたものであると考えることができよう。アメリカを始めとする欧米の影響力が多大な現代、英語で配信された記事の論調は、世界で「主流」あるいは「常識」とされる考え方が形成される過程に大きく寄与してくる可能性がある。本論では、イルカとイルカ漁をめぐる欧米特有ともいえる論理を明らかにし、言説が常識を作り上げていく過程の一端を解き明かすことを目的としたい。尚、論文中の記事の翻訳は全て筆者の責任によるものである。

## 2. 問題意識と調査目的

日本においては、「ザ・コーヴ」が、2009年10月に第22回東京国際映画祭で初めて公開された際も、2010年のアカデミー賞受賞時も、数値の捏造、やらせ、恣意的な編集が多いとされるこの映画の手法を批判した記事や、外国人が日本の地域文化を一方向的に批判する事に対する、太地町の立場からの反論を紹介した記事などが少数見られた程度で、マスメディアの反応は概して冷静であった。その後、2010年初夏には、日本国内での一般公開にあたって、作品を「反日的」と断じる団体が抗議活動をし、いくつかの映画館が上映中止に追い込まれたり、逆に言論表現の自由をめぐる、日本ペンクラブや日本弁護士連合会などが、上映中止を憂慮する声明を出したりして、一時的に社会問題化の様相がみられたが、ほどなく沈静化した。2010年8月末現在、この映画は少数の映画館でまだ上映されているが、マスメディアの話題にのぼることはもはやほとんどなくなった。また、この映画を受けて、イルカ漁や太地町が露骨な批判的にされることは、日本国内ではなかった。これについて、*International Herald Tribune* は、次のように述べている。

There is a deep belief in Japan that whale and dolphin hunting are important parts of the country's traditional livelihood and culinary culture, a practice to be defended against foreign interference. There is also a strong taboo in the Japanese news media against any criticism of the country's farmers and fishermen, often depicted as heroic defenders of a way of life that is fast disappearing (*International Herald Tribune*, Oct. 23, 2009).

(日本では、クジラ・イルカ漁は、外国人の干渉から守られるべき重要な伝統文化だという信念が根強い。また、急速に消えかかっている生活様式を実践するヒーロー的な人々として描写されることが多い農業者や漁業者に対しての批判は、日本のメディアにとって強いタブーである。)

タブーであるかどうかは議論の余地があるかもしれないが、イルカ漁の是非を問うような議論

は、筆者の知る限り国内では表立っては起こっていないことは確かである。

翻って、欧米では、この映画の公開後、イルカ漁に対して、あるいは、太地町に対して、感情的な反応がいくらか目立ったような印象を受ける。例えば、太地町と1981年から姉妹都市関係を結んでいたオーストラリアのブルーム町議会は、この映画が公開された直後の2009年8月、太地町との姉妹都市提携の解消を議決した。太地町のイルカ漁に関して、ブルーム町長は、「我々の誰もイルカに起こっている事を許すことはできない。('[N]one of us can condone what is happening with dolphins', *Jiji Press English News Service*, Aug. 27, 2009)」と述べている。この議決は、結局、10月に撤回されたが、ブルームでは、日系人墓が荒らされたりするなどの関連事件も起きた。また、「ザ・コーヴ」の主張は、多くの欧米人の心を捉えたようで、観客は「スタンディングオベーションと多くの涙 ('standing ovations and not a few tears', *National Post*, Aug. 7, 2009)」で反応したと報道された。実際に、欧米の英文メディアにおいては、以下のように、この映画を絶賛する論調が目立った。

"The Cove" is topnotch journalism (*Star Tribune*, Aug. 7, 2009) .

(ザ・コーヴは一流のジャーナリズムだ。)

This is a great, green film about ecological cruelty, the kind of work that exposes wrongs to the world (*Tulsa World*, Nov. 13, 2009) .

(これは環境への残虐行為を描いたすばらしい環境保護映画で、悪事を世界に暴露するものである。)

[I]t's quite simply one of the year's best movies (*Toronto Star*, Aug. 7, 2009) .

(率直に、これは今年のベスト映画の1つだ。)

オーストラリアやアメリカ、英国などの欧米国は、もともと反捕鯨を強硬に主張している国々であり、小型クジラの種類とされるイルカを狩猟することに対する感情的反発は根強い。欧米人にとっては、鯨やイルカは環境保護のシンボリック的存在でもある。この映画が欧米で強く支持される背景には、反捕鯨を主張する欧米国と、捕鯨国である日本との長年の政治的、文化的、イデオロギー的確執があるのだ。また、この映画は、「日本のイルカを救いましょう」と「アース・アイランド研究所」という環境団体が製作を支援しており、アメリカ政府や日本政府からテロリストと認定されている過激な反捕鯨団体「シーシェパード」も間接的に製作に絡んでいる。すなわち、この映画は、欧米では、あたかも中立的・客観的に事実のみを描写した、「エコドキュメンタリー」あるいは「環境ドキュメンタリー」であるかのように評価されているが、実質的には、そもそも反クジラ・イルカ漁のイデオロギーと不可分な、プロパガンダの要素を多分に含んでいるという事も付記しておくべきだろう。

牛や豚などの肉を常食しながら、クジラやイルカについてはある種特別視する独特の傾向が見られる欧米の言説においては、「イルカ=かわいい=特別=殺すべきではない=食べるべき

ではない」という「イルカ・イデオロギー」とでも名付けるべきものが存在している。欧米メディアは、太地町のイルカ漁について、「この例外的に知能が高く、人間に優しい種を破壊する行為には何か独特な野蛮さがある。('[T]here's something uniquely barbaric about the destruction of this exceptionally intelligent, human-friendly species', *South Florida Sun-Sentinel*, Aug. 7, 2009)」とか、「かわいらしく知能の高いほ乳類の大量虐殺 ('mass slaughter of the beautiful, highly intelligent mammals', *The Patriot Ledger*, Aug. 7, 2009)」と述べて非難している。イルカ漁に関しては、多くの記事がかなり激しい比喻を用いて断罪している。例えば、「悪の大殺戮 ('evil bloodbath', *The Daily News*, Sep. 22, 2009)」、「民族の大量虐殺と同様の悪 ('as bad as genocide', *The Washington Post*, Aug. 7, 2009)」、「イルカの処刑 ('dolphin executions', *Detroit News*, Aug. 7, 2009)」、「大規模な環境犯罪 ('massive ecological crimes', *PR Newswire*, Dec. 16, 2009)」などである。そして、*The Herald* は、「おそらく日本の捕鯨関係者を除いて、全ての人はイルカが好きだ。('[E]verybody, with the probable exception of the Japanese whaling industry, loves dolphins', *The Herald*, Aug. 7, 2009)」と根拠もなく述べているし、他紙は、イルカを「ひれを持った友達 ('finny friends', *New York Post*, Jul. 31, 2009)」と擬人化し、この映画は、「世界の人々の目の前で日本に恥辱を与える ('shame the Japanese in the eyes of the world', *Star Tribune*, Aug. 7, 2009)」としている。これらの記事の前面に出されているのは、可愛く、賢く、人間の友人であるイルカを殺すのは絶対的な悪であり、エコロジーすなわち海洋生物環境保護という大義名分と使命感の下でイルカを守らなければならないとする論理である。

一方、日本でもイルカは水族館のショーなどで人気の動物であるが、古くからイルカ肉を食してきた日本のいくつかの地方では、イルカは牛肉や豚肉と同じ食料の一種と見なされ、イルカ食は固有の伝統文化と見なされている。また、イルカは海の生態系の上位に属し、大量の魚を食べるので、漁師たちにとっては、増えすぎると海の生態系を壊す害獣でもあり、漁の競争相手でもある。このようなイルカの間引きの意味と、食料資源としての活用の意味で、日本政府は、科学的見地に基づき、種の資源量が持続できる範囲内である、毎年約2万頭のイルカの捕獲枠を、太地町を含む国内沿岸で認めている。毎年9月から半年間にわたって行われる、太地町の追い込み漁で捕獲されるイルカのうち、一部は世界中のイルカ水族館へショーなどのために売られ、残りは食肉として売買される。つまり、イルカ漁は、太地町の経済活動を支えているのである。太地町にとって、イルカ漁は、伝統文化であり、経済活動の要であり、イルカの頭数が増えすぎて海洋の生態環境が変わることを防ぐための手段でもある。太地町にイルカ漁が存在するのは、太地町がそれを必要とした歴史的、文化的必然性があったのだとも言える。

以上のように、「ザ・コーヴ」に通底する欧米的な価値観と、日本の伝統的イルカ漁地域の価値観は、全く異質のものであり、互いがそれぞれの信念と文化的価値観と生活様式に基づいた正義を持っている。であるならば、どちらが正しいとか間違っているとかいう二元論的な議論は、多様な文化、多様な価値観が尊重されるべき時代に本来そぐわないはずである。それにもかかわらず、映画では、一方的に欧米側の視点から日本の地域文化が断罪され、しかもその

偏った視点に対して、それがあたかも世界の主流の考えであると保証するかのように、ハリウッドのお墨付きが与えられた。このことは、物の見方や感じ方を欧米的にすることを世界に迫る、まさに「価値観」の植民地主義とも呼ぶべき事象であり、情報システムの一元化が進むグローバル化時代の陥穽の一端を顕著に表している。

話は少々それるが、グローバル化の進んだ現代、アメリカや英国の国家語であり、アングロサクソンの民族語である「英語」は、言語の中でもっとも優等な言語であると人々に「自然に」思われており、英語中心主義のイデオロギーが、世界中の、教育を始めとするさまざまな場面で根付いている状況がある。筆者は、かつての研究において、17世紀以降の英国の植民地主義や20世紀以降のアメリカの繁栄とグローバル化の進展の中で、英語が他の言語を抑圧しながら世界に広まり、「世界語」の地位を得てきた過程を、16世紀から20世紀までの英米の学者や政治家、作家などによる英語についての言説を手がかりに、歴史的、政治的、文化的、イデオロギー的見地から考察した (Mizokami (2001), Mizokami (2002))。後ほどまた述べるが、今回のイルカ漁という日本の地域文化に対して、「野蛮である」、「残酷である」と断罪する欧米側からの一方的なラベル付けの言説は、かつて、17世紀から19世紀の植民地主義時代に流布した、宗主国が、植民地の言語を「野蛮である」、「価値がない」と一面的に見なして抑圧したときの言説と平行をなしている。何世紀もの時を経た現在、欧米人が植民地主義時代とほぼ同じ、「欧米(人、文化、言語) = 優等、非欧米(人、文化、言語) = 劣等」という前提を当然視するかのような論理の言説を繰り返して、武力ではなく、価値観で世界を支配しようとしているかのような現象は興味深い。そしてもちろん、このような価値観植民地主義の事象と、英語の普及は共犯関係をなしている。

次節以降では、「ザ・コーヴ」について、世界中の英字新聞や雑誌に書かれた記事を分析し、欧米人が価値観の植民地主義を実践するにあたって、どのようなイデオロギー的言説を流布させているのかを明らかにしていきたい。

### 3. 調査方法

本論文で分析対象とする新聞・雑誌記事の収集には、世界中の400紙以上の主要英字新聞と雑誌の記事を収録したデータベース、ProQuest Newspapers を使用した。2010年6月17日の時点で、「The Cove」と「dolphin」をキーワードとして検索して出てきた、この映画と関連している内容の記事221件と、「The Cove」と「Academy award」をキーワードとして検索して出てきた記事35件のうち、上記と重複している物を削除した、合計226件を分析対象とした。このうちには、ほぼ同じ記事が、異なった媒体に配信されたものや、ほぼ同じ記事が、同じ新聞のいくつかの異なった地方版用に配信されたものもいくつか含まれている。記事には、映画の内容を詳しく紹介し論評した長い論説記事、週末の娯楽情報などのためのごく短い映画紹介記事、読者や識者からの投稿などのオピニオン記事、社説、オバリーやシホヨス監督へのインタビュー記事、

この映画とは直接の関連がない話題の中で、この映画に少々言及されたものなど、さまざまな種類があるが、今回はすべてを調査対象とした。記事の長さは、50語に満たないものから3000語を超えるものまで多様である。

本論では、以下の2つの段階に分けて、上記の資料を分析した。まず、第一段階として、これらの記事のすべてを、その内容に沿って、次の4つのカテゴリーに分類した。1つめは、反イルカ漁を訴える映画の視点を支持しているもの、すなわち、「イルカ=かわいい=特別=殺すべきではない=食べるべきではない」というイルカ・イデオロギーが明らかに表出されているもの（カテゴリー1）、2つめは、それとは反対に、映画に通底するイルカ・イデオロギーを批判するコメントを含んだもの（カテゴリー2）、3つめは、中立を保とうとしているもの（カテゴリー3）、4つめは、記事の価値判断が不明なもの（カテゴリー4）である。ごく短い映画紹介の記事や、イルカ漁とは直接関連しない話題の中で、この映画に少し言及したのみの記事のカテゴリー分けの基準であるが、例えば、この映画のことを「イルカ漁 (dolphin fishing あるいは dolphin hunting)」についての映画と紹介しているものは、イルカ漁に対して中立的な立場を保とうとしていると見なし、「イルカ虐殺 (dolphin slaughter)」あるいは「イルカ殺し (dolphin killing)」についての映画などと表現している記事は、太地町の漁師が目的もなくイルカを殺しているような印象を読者に与える単語を使った恣意的な表現を用いていると考えられるので、イルカ・イデオロギーを反映しているものと見なした。

さらに第二段階として、上記のカテゴリー1に当たる、反イルカ漁の主張を支持している記事の言説について、それらに含まれるイデオロギーが、いかなる論法で、価値観の植民地主義を実践しようとしているのかを詳しく分析した。

## 4. 調査結果と考察

### 4.1. カテゴリー分けについて

	カテゴリー1	カテゴリー2	カテゴリー3	カテゴリー4
記事の数 (%)	151 (67%)	34 (15%)	24 (11%)	17 (8%)

表は、記事のカテゴリー分けの結果である。カテゴリー1に入る記事が、約7割を占めた。このカテゴリーに分類したのは、イルカ・イデオロギーを明確に支持する映画紹介記事や論説記事、読者の投稿などで、映画の視点を批判するコメントが一言も入っていない記事ばかりである。カテゴリー1に入る記事は、4.2. で詳しく分析するので、ここでは詳述しないが、一例を挙げると次のようなものがある。

To kill whales, the largest mammals on earth is bad; to catch sharks, chop off their fins and throw them back into the sea, writhing in agony, is horrible; but for the Japanese to kill 20,000 dolphins annually is

beyond words (*The Daily News*, Sep. 22, 2009).

(地球上で最も大きい動物である鯨を殺すことは悪である。サメを捕まえ、ひれを切り落とした後で苦しんでいる彼らを海に捨てることは恐ろしいことである。しかし、日本人が、毎年2万頭ものイルカを殺していることについては言葉も出ない。)

一方、映画の主張に対して一言でも懐疑的コメントを入れた記事や、映画の主張に反する、太地町や日本政府の主張を紹介している記事は、カテゴリー2に分類した。このカテゴリーの記事は、実際には、映画のイルカ・イデオロギーについてかなり強い批判をした記事から、全般的には映画を好評価しながら懐疑的なコメントを申し訳程度に一言入れただけの、実質的にはほぼカテゴリー1に近いものまで、批判のトーンは多様である。しかし、イルカ・イデオロギーを前面に出した、欧米的価値観が中心的な言説が主流を占めている中で、数はそれほど多くないながらも、冷静さと客観性を保った言説もあったということは、「欧米人」と一口に括っても彼らの価値観は必ずしも一枚岩ではないということを意味する。カテゴリー2の言説を以下にいくつか紹介しておく。まずは、イルカ肉を食用にすること自体に問題があるのかと疑問を呈した記事や、イルカを特別扱いすることへの違和感を述べた記事である。たとえば、*The Washington Post* は、

Americans kill cows, pigs and chickens for food, and we hunt deer in the forest, bears in the mountains, armadillos in the deserts. . . If you eat meat, can you condemn the killing of dolphins? (*The Washington Post*, Aug. 7, 2009)

(アメリカ人は食用に牛や豚や鶏を殺す。我々は、森で鹿を狩り、山で熊を狩り、砂漠でアルマジロを狩る。もし、自分が肉を食べるなら、イルカを殺す事を非難できるのか?)

と述べ、「これは客観的なドキュメンタリーではない。偏向している。(“This isn’t an objective documentary. It’s often tendentious.”)と断じている。*Wall Street Journal* は、この映画を「過剰な術策をめぐらせ、事実が不足 (‘with an excess of artifice and a dearth of facts’))した「疑似ドキュメンタリー (‘quasidocumentary’))だと批判している (*Wall Street Journal* (Eastern Edition), Jul. 31, 2009)。

また、次の2つの記事は、イルカをあたかも人間の友人のように擬人化し、イルカは「かわいいから」殺すべきではないとするイルカ・イデオロギーに反感を示している。

“Lovely” is the operative word. Skillful and hugely entertaining as it is, I’m not sure *The Cove* would be quite as potent as it is if the subject were, say, walruses instead of dolphins. . . [I]t comes dangerously close to making the narcissistic case that dolphins deserve to be saved because they’re cute and breathe

air like we do (*The Village Voice*, Jul. 29-Aug. 4, 2009).

(「かわいい」という言葉は効力がある。「ザ・コーヴ」はとても巧くできていて面白いが、私は、もし、主人公がイルカでなくて、例えばセイウチだったら、映画に同じような影響力があったかどうか分からない。この映画は、イルカはかわいくて、我々と同じように呼吸をするから、救われなければならないという自己陶酔的な主張に危険なほど近い。)

[S]hould we be assigning human characteristics to animals? Is that fair to them? Or is it even germane to the issue? Can we define what is happening to those dolphins as “right” or “wrong”, “good” or “evil”? (*Tri-City Herald*, Aug. 28, 2009)

(我々は動物を擬人化すべきなのか？それは公正なことか？それは妥当なのか？我々は、イルカに起こっている事を、「正」と「邪」、「善」と「悪」で定義できるのか？)

そして、次の2つの記事は、映画の一面的、感情的な物の見方を批判している。

The film makes the Japanese seem inhuman, and never offers an alternative argument or a larger context for dolphin fishing (*Denver Post*, Jan. 8, 2010).

(この映画は、日本人を非人間的に見せている。そして、別の見方や、イルカ漁に関するもっと大きな文脈について決して言及する事がない。)

The Cove is weakened only by a few unanswered questions. . . Why is it worse to slaughter dolphins than to slaughter cows or pigs? (Just because dolphins are cuter?) What of Japan’s argument that culling dolphins helps preserve smaller fish? And what is so merciful – in comparison with the revealed brutality of Taiji’s killing methods – about western slaughterhouses and murder-for-meat industries? (*Financial Times*, Oct. 29, 2009)

(2、3の疑問に答えていないことにより、「ザ・コーヴ」の主張は力が弱められる。なぜ、イルカを殺すことは、牛や豚を殺す事より悪いのか？(イルカの方がより可愛いからか？)イルカを間引きする事で小さい魚を保存できるという日本の主張はどうか？そして、西洋の屠殺場は、太地町のイルカの殺し方の残酷さに比べて、どのように慈悲深いのか？)

一方、次のように、太地町の立場から、イルカ・イデオロギーに反論した記事もカテゴリー2に入れた。

But many in Taiji take the dolphin hunt for granted as part of everyday life. They are defensive about The Cove, seeing themselves as powerless victims of overseas pressure to end a simple and honest way of making a living (*The Observer*, Sep. 5, 2009).



(太地町の多くの人々は、イルカ漁を日常生活の一部と見なしている。彼らは「ザ・コーヴ」に対して神経質になっていて、自分たちのことを、単純で正当な生計方法を終わらせようとする外圧に苦しむ無力な犠牲者と思っている。)

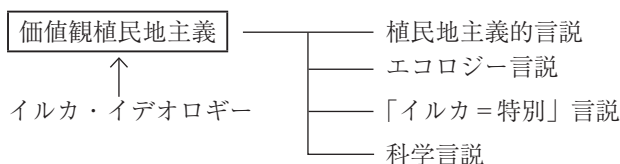
People in Taijicho voiced their disappointment over “The Cove” winning the Oscar for best documentary at the Academy Awards on Sunday night, saying the film about the town’s dolphin hunting is inaccurate and intolerant of cultural differences (*McClatchy-Tribune News Service*, Mar. 8, 2010).

(太地町の人々は、「ザ・コーヴ」が日曜夜にアカデミー賞を受賞したことに落胆の声を上げた。人々は、映画は、町のイルカ漁を不正確に描いていて、文化の違いに寛容ではないと言っている。)

カテゴリ3と4については今回は詳述を控えるが、ここに分類されたのは、短い映画紹介記事などが中心であったということのみ記しておく。

#### 4.2. 反イルカ漁言説のイデオロギー分析について

ここからは、カテゴリ1に分類した、イルカ・イデオロギーを表出している言説を細かく分析していく。イルカ・イデオロギーを含んだ言説は、大きく分けて次の4種類の言説から成り立っている。それは、1、植民地主義的言説、2、エコロジー言説、3、「イルカ＝特別」言説、4、科学言説である。これらが全て、あるいはいくつか組み合わせあって、「イルカ＝かわいい＝特別＝殺すべきではない＝食べるべきではない」とする「イルカ・イデオロギー」言説を形成し、価値観の植民地主義の実践を正当化している。図示するなら、およそ次のようになるだろう。



以下に、上記4種類の言説を1つずつ詳しく説明していこう。

##### 4.2.1. 植民地主義的言説

まず、1つ目は「植民地主義的言説」である。かつての植民地主義を正当化したのは、植民者（キリスト教系白人の支配者）が現地人（被支配者）よりも優等であると根拠もなく断定する思想である。「白人の責務」、「文明化の使命」に基づいて、植民地の無知な未開人を教化し、野蛮な文化を欧米風に文明化させなければならないとする言説が、侵略を正当化した植民地主

義の言説の特徴の一つである。たとえば、以下に示すのは、誕生日を祝うために集まったオーストラリアのアボリジニに向けて、ヴィクトリア女王が述べたメッセージである。

Black men –

We wish to make you happy. But you cannot be happy unless you imitate good white men. Build huts, wear clothes, work and be useful.

Above all you cannot be happy unless you love God who made heaven and earth and man and all things.

Love white men. Love other tribes of black men. Do not quarrel together. Tell other tribes to love white men, and to build good huts and wear clothes. Learn to speak English (Queen Victoria, 1838, quoted in Bailey, 1991, 85).

(黒人たちよ。我々はお前たちを幸せにしたい。しかし、良き白人を模倣せねば、幸せにはなれない。小屋を建て、服を着て、働き、役立ちなさい。とりわけ、天と地と人と万物を創造された神を愛さねば幸せにはなれない。白人を愛しなさい。他の部族の黒人を愛しなさい。けんかをしてはいけない。他の部族に、白人を愛し、小屋を建て、服を着るように伝えなさい。英語を話せるようになりなさい。)

上記と同様に、植民者が、白人とその文化、宗教、言語の優等性になんら疑問を持つことなく、植民地の人々に自らの価値観を押し付けようとした当時の典型的な言説の例は他にもいくらかでもある。例えば以下は、19世紀イギリスの著名な政治家、歴史家で、英国植民地下のインドに公教育委員会の委員長として赴任し、英語の公用語化を進めたマコーレー (T. B. Macaulay) の1835年2月2日の「インド教育覚書」の一節である。マコーレーは、現地の言語を、「インドのこの地方で話されている言語は、文学的情報も科学的情報も含んでいない。('[T]he dialects commonly spoken among the natives of this part of India, contain neither literary nor scientific information'.)」と侮蔑し、さらに、「インドやアラビアの全ての土着の文学を集めても、その価値は、良いヨーロッパの図書館の書架の1つの価値にも及ばない。('[A] single shelf of a good European library was worth the whole native literature of India and Arabia'.)」と言い放っている。ここには、現地の言語文化を尊重する態度は全く見られない。「ヨーロッパの優越性は、絶対的である。('[T]he superiority of the Europeans becomes absolutely immeasurable.）」と臆面もなく述べるマコーレーの議論は、19世紀当時のヨーロッパで主流であった欧米中心主義のイデオロギーが前面に出された差別的なものである。

[E]nglish is better worth knowing than Sanscrit or Arabic; that natives are desirous to be taught English, and are not desirous to be taught Sanscrit or Arabic.

(英語を知ること、サンスクリット語やアラビア語を知る事よりもずっと価値がある。現地人は、英語を教えられることを切望しており、サンスクリット語やアラビア語を教えられるこ

とを望んでいない。)

「ザ・コーヴ」の視点を支持する言説は、16世紀から19世紀に流布した、欧米（人）を優等とし、植民地（人）を劣等と見なした欧米中心の植民地主義言説と平行をなすような視点を持って展開されている。カテゴリー1に分類したいくつかの記事の中では、まず、太地町が、人を寄せ付けないおぞましい未開の地だということが強調される。

[I]t's difficult to watch it without thinking of subtitles like "The Place Where Evil Dwells" or "The Little Town With the Really Big Secret" (*Los Angeles Times*, Jul. 31, 2009).

(映画を見ながら、「悪の住む所」あるいは、「大きな秘密のある小さな町」というサブタイトルを考えずにはいられない。)

そこは、「世界の向こう側の小さな入り江 ('a small cove on the other side of the world', *The Sun*, Sep. 5, 2009)」であり、「有刺鉄線に囲まれ、「立ち入り禁止」のサインがある人里離れた場所 ('A remote cove surrounded by barbed wire and "Keep out" signs', *Journal Record*, Aug. 10, 2009)」で、「荒れ果てた環境 ('inhospitable environment', *South Wales Echo*, Jan. 2, 2010)」である。そこは、イルカにとって「死の危険のある場所 ('deathtrap', *South Florida Sun-Sentinel*, Aug. 7, 2009)」であるが、撮影隊 (= 植民者) にとっても、命の危険がある場所であると報道される。

In the film, he refers to one fellow activist who was found strangled on a beach while O'Barry was away. O'Barry says he believes his life is absolutely in danger in Japan because of his activism (*Deseret News*, Jan. 25, 2009).

(映画の中で、オバリーは、自分がいない間に、ある活動家が海岸で殺されていた事件に触れる。彼が言うには、イルカ漁に反対する活動で、彼の命は、日本で確実に危険にさらされている。)

[A] group of fishermen in the small Japanese town of Taiji would like to see his [O'Barry's] head on a harpoon (*New York Post*, Jul. 26, 2009).

(太地町の漁師たちは、オバリーの頭に鉤が突き刺さるのを見たいであろう。)

また、太地町の漁師は、「怒った漁師が体で立ち向かってくる ('angry fishermen physically confront them', *Star Tribune*, Aug. 7, 2009)」などの表現で、好戦的な人々であるかのように報道され、イルカ漁に関わる人々は「悪党たち ('thugs', *ibid.*)」だと一方的に規定される。さらに、漁師には「やくざがバックについている ('Yakuza mobs allegedly backing them', *St. Petersburg Times*, Aug. 9, 2009)」ことにされている。

撮影隊は、この未開の地の悪人たちの手から、「無実の者たちを救い出し ('to rescue innocent

lives', *Houston Chronicle*, Aug. 7, 2009)」、この悪人たちに文明を啓蒙する使命を持って命がけで聖戦にやってきた、「エコ戦士たち ('eco-warriors', *Las Vegas Review-Journal*, Oct. 23, 2009)」、あるいは、「環境を守るための特殊部隊 ('environmental commandos', *Los Angeles Times*, Jul. 31, 2009)」と表現される。

太地町のイルカ漁文化については、次のように、その方法が野蛮であり、残酷であると断罪される。

As the dolphins pass by, the fishermen surround them in boats and lower poles into the water, banging them to frighten their prey and confuse their sonar. The panic-stricken creatures are then herded into the narrow cove, trapped in nets and stabbed repeatedly. As the sea becomes a watery abattoir, the dolphins flail and thrash for long, agonizing minutes, giving the lie to official assertions that they die instantly (*The Independent on Sunday*, Aug. 30, 2009).

(イルカが通りかかると、漁師たちは船で取り囲み、水中に棒を入れ、大きな音を立てて、獲物を怖がらせ聴覚を狂わせる。パニックになったイルカは、狭い入り江に集められ、網で捕らえられ、何度も何度も突き刺される。海は屠殺場となり、イルカは長い間苦しみにのたうち回る。それは、イルカは即死するとの日本政府の主張が偽りであることを示している。)

Those left behind will be butchered one by one, either by having their throats cut or with a pike driven into their neck, so the meat can be sold in supermarkets, in a slaughter that will turn the water in the bay crimson (*The Independent on Sunday*, Oct. 11, 2009).

(残りのイルカは、のどをかき切られるか、槍で首を突き刺されるかして、1頭ずつ殺戮される。その肉は、スーパーで売られるのだ。虐殺で、海の水は真っ赤に染まる。)

It was like a military operation. . . The pursuit was relentless (*San Gabriel Valley Tribune*, Aug. 24, 2009).

(それは軍事行動のようだ。追跡は無慈悲だ。)

欧米人にとって、イルカ漁の方法は、「信じられないくらいむごく残虐 ('indescribably cruel and bloody', *Journal Record*, Aug. 10, 2009)」、「とても残酷で、はらわたがひっくり返るほど原始的 ('so brutal and gut-churningly primitive', *International Herald Tribune*, Aug. 5, 2009)」に見えるようで、「「漁」という語は適切ではない。これは無差別の虐殺だ。 ("Fishing" isn't really the term – this is wholesale slaughter', *News & Observer*, Dec. 11, 2009)」と断じている記事もある。また、太地町のイルカ漁は、完全に合法的な行為であるのに、「不法で残虐なイルカ殺害 ('the illegal and cruel slaying of dolphins', *Journal record*, Feb. 17, 2010)」という誤った情報を流している記事もいくつかある。これらの報道に共通するのは、牛や豚を多かれ少なかれ似た方法で日々屠殺

している欧米人であるのに、イルカを食用に殺すのは、「犯罪」であると軽蔑する次のような価値観である。

[A] bloody disgrace to think that a man, the most intelligent of all creatures, could act in such a vile manner, committing such gory, horrible crimes (*The Daily News*, Sep. 22, 2009).

(生物の中でもっとも知能が高い人間が、このような下劣な方法で、残忍なおぞましい犯罪を犯していると考えるのはいまいましい不名誉だ。)

そして、イルカ漁を犯罪と断定する欧米人独特の論理から、太地町の漁師の気持ちまでもが次のように根拠なく解釈されている。

[T]he large tarps shrouding the goings-on at the inlet suggest the fishermen know their work is at least controversial but perhaps shameful, too (*Denver Post*, Aug. 7, 2009).

(入り江で起こっていることをシートで覆って隠しているということは、漁師たちが、自らの仕事が、少なくとも論争的であることを知っているし、おそらくは恥ずべきものと思っていることをうかがわせる。)

ここまでに見た言説に通底するのは、欧米人の、自らの価値観を唯一の正義と信じ、他の価値観をまったく認めようとしないう米中心主義であり、異なった文化を「原始的」、「野蛮」などと一方的に規定し、欧米化(=文明化)を迫る植民地主義的な態度である。

[A] good thing if there's any chance for Japanese public opinion to force changes in that nation's culinary culture. Both whale and dolphin meat line its markets' shelves. The thought turns our stomachs. Hopefully, it will more Japanese (*Orlando Sentinel*, Nov. 3, 2009).

(日本人の世論が、日本の食文化に変革を迫る可能性がもしあれば良いことだ。鯨肉もイルカ肉も、日本のスーパーの棚に並ぶ。その考えは、我々に吐き気を催させる。日本人もそうであることを願う。)

以上見てきたように、「ザ・コーヴ」のイルカ・イデオロギーを支持する言説の1つ目の特徴は、このような露骨で古典的な植民地主義的態度で、欧米流の物の見方や考え方を押し付けることで、価値観の植民地主義を実践しようとしていることである。

#### 4.2.2. エコロジー言説

「イルカ=かわいい=特別=殺すべきではない=食べるべきではない」というイルカ・イデオロギーを旗印にして価値観の植民地主義を実践するにあたって、イルカ漁が野蛮で残酷であ

ると主張する植民地主義的言説以外の観点からも欧米独特の論理の言説が展開されていく。そのうちの1つが、イルカ漁はエコロジーに反するという主張、「エコロジー言説」である。

現在では主要な反捕鯨国であるアメリカや英国、オーストラリアなどは、かつては捕鯨国であった。彼らは、食用ではなく主に鯨油を目的に捕鯨を行っていたが、石油が利用可能になったことや、植物油の生産も増えたことで、鯨油の利用価値が下がったため、20世紀半ば頃に捕鯨から撤退した。彼らは、捕鯨にはコストがかかるため、経済的に引き合わなくなって撤退したのであり、エコロジーを理由に撤退したのではない。しかし、その後、環境に対して大きな関心が集まっていた1960年代から70年代という時代背景のもとで、鯨やイルカを、絶滅の危機があるとして環境保護のシンボルに祭り上げ、激しい反捕鯨運動を展開しはじめた。少年とイルカの心温まる友情物語である、「わんぱくフリッパー」というアメリカのテレビ番組が1960年代に世界で流行したことも、反捕鯨の気運を高める要因の1つとなったと言われる。イルカや鯨は人間の友達だから、それらを殺す事は人間を殺す事と同じくらい倫理に反する事だという考えがその流れから生まれたようである(小松、2002)。反捕鯨国の活動により、商業捕鯨の一時停止が1982年に国際捕鯨委員会(IWC)で決議され、1987年までに商業捕鯨は順次停止されていった。禁止となったのは、大型鯨類であり、小型鯨類に属するイルカなどは、漁の禁止の対象にはなっていない。しかし、禁止されていないイルカ漁を日本が行っていることについて、次のような言説が流布される。

Having long ignored global attempts to protect whales from being fished to extinction, the Japanese found dolphins easier to locate, and protect the capture and slaughter that supports a town's economy. . . (Scotland on Sunday, Oct. 18, 2009)

(鯨を絶滅から守ろうとする国際的な試みを長い間無視したあと、日本人は、イルカならより簡単に見つけられ、町の経済を支えるための捕獲と虐殺を続けることができると思ったのだ。)

次の記事は、日本が小型鯨類の漁を守るために、あたかも国際捕鯨委員会で不正なことをしているかのような報道をする。そして、同時に国際捕鯨委員会が、絶滅しそうなイルカを守らないことを糾弾する。

The Cove touches on Japan's corrupt effort to preserve this "tradition", bribing poor island nations of the Caribbean to vote with them on the International Whaling Commission (Orlando Sentinel, Aug. 7, 2009).

(「ザ・コーヴ」は、日本がこの「伝統」を守るために不正をはたらいていることに触れる。日本は、国際捕鯨委員会で、貧しいカリブの国々に、自分たちの案に投票してもらおうと賄賂を贈ったのだ。)

Whales, you may recall, have been protected from commercial fishing since 1986. Dolphins and porpoises are not. The Cove devotes some time to Japan's political maneuvering on the International Whaling Commission, which it portrays as too impotent, ignorant and/or chicken-livered to do anything about the 23,000 dolphins butchered each year (*Houston Chronicle*, Aug. 7, 2009).

(お分かりだと思うが、商業捕鯨が禁止された1986年以来、鯨は保護されている。イルカや小型鯨類は保護されていない。「ザ・コーヴ」は、日本が国際捕鯨委員会で政治的駆け引きをこらしていることを示し、委員会が、無力で、無知で、臆病すぎて、毎年2万3千頭も虐殺されるイルカについて何も手を打たないところをあぶり出す。)

全ての鯨資源が絶滅の危機にあるとの欧米国の主張に反して、調査によると、鯨資源の多くは絶滅に瀕しているわけではなく、資源量は回復しつつある(大隅、2003)。太地町のイルカについても、国の定めた捕獲量に従って漁を行っているので、種の保存については問題がないようである。しかし、欧米人の論理は、何頭なら殺しても環境保全に問題がないかということではなく、イルカは特別だから一頭も殺してはいけないということのようだ。

Apart from these drive hunts, Japan annually kills at least 18,000 Dall's porpoises at sea, as well as persisting with so-called scientific whaling, despite numerous International Whaling Commission (IWC) resolutions that this lethal research should cease (*Cape Times*, Mar. 11, 2010).

(日本は、イルカの追い込み漁だけではなく、毎年少なくとも1万8千頭のイシイルカを海で殺している上、いわゆる調査捕鯨を続けている。国際捕鯨委員会は、鯨を殺さねばならない調査捕鯨をやめるよう何度も決議しているのに。)

そして、故意か間違いかは不明であるが、毎年日本国内で捕殺されるイルカは2万頭程度、太地町では2千頭程度なのに、かなり多くの記事が、「この秘密の入り江で、毎年2万3千頭のイルカが、残酷な方法で食肉のために殺される。(‘23,000 dolphins are killed for meat at this secret cove each year in a brutal exercise’, *The Gold Coast Bulletin*, Aug. 1, 2009)」などと太地町の漁獲量の誤った情報を流している。

三浦(2009)は、かつてナチスが、アーリア人種を優等とし、ユダヤ人種を劣等と見なして弾圧する優生学的な思想を実践する一方で、自然保護を唱えるエコロジーの思想のもとで動物保護を行っていた事実を指摘している。現代は、エコロジーの思想は、誰もが異議を唱えることのできない「正しいこと」とされている感もあるが、エコロジーや環境保護論者の思想が、極端な場合は、ナチズムのような全体主義と結びつく危険性があることを特記しておきたい。

イルカ・イデオロギーを支えるために流布されるエコロジー言説は、イルカは絶滅に向かっているという(故意の)思い込みと、イルカを一頭でも殺す事は罪であるとの欧米独特の論理

で展開されていく。このような、動物を殺すのは罪悪だとする主張は、野生動物を狩猟せざるを得ない人々の人権を否定することによってはじめて成り立つという事実は不可視にされる。ここでは、日本は、国際的取り決めに反する事はしていないし、イルカは十分な資源量があるという日本側の主張は、おそらく聞き入れられることはない。

#### 4.2.3. 「イルカ＝特別」言説

次は、イルカはかわいく知能が高いから殺してはならないとする主張、すなわち、「[イルカ＝特別]言説」である。いくつかの記事でイルカは、「人間と同じくらい高い進化をした生物（‘creatures who are almost as high on the evolutionary scale as man’, *Toronto Star*, Aug. 7, 2009）」、「地球上で最も知的な動物の1つ（‘one of Earth’s most intelligent creatures’, *The Times*, Oct. 16, 2009）」、「笑顔と、感情のこもった目と、音によるコミュニケーションで知られる賢い生物（‘intelligent creatures known for smiles, soulful eyes and sonar communication’, *Tulsa World*, Nov. 13, 2009）」などと表現されている。前節でも、イルカを人間の友達と見なすイルカの擬人化について少々言及したが、イルカの知能の高さや特別さを説明するときに頻繁に持ち出されるのが次のような言説である。

[M]any a seafarer will recount stories of how dolphins have helped to save the lives of stranded people on the lonely seas. They are our friends at sea (*The Daily News*, Sep. 22, 2009).

(多くの船乗りが、イルカが、人気のない海で取り残された人々の命を救ったという話を語る。彼らは、われわれの海の友達なのだ。)

It also makes a compelling case for the intelligence of dolphins, the only wild animals known to come to the aid of humans (*Star Tribune*, Aug. 7, 2009).

(映画は、人を救助しにやってくる唯一の野生動物として知られているイルカの知能の高さを強く主張する。)

イルカには、海で沈みかかっている物を支えたり押し出したりする習性があると言われる。であれば、イルカが溺れている人を仮に結果的に助けたとしても、実際には人間が溺れているからかわいそうと思って助けたのではなく、単に浮いている物（人間）を押しただけの可能性がある。また、イルカには同族を襲ったり、人間を襲ったりする習性があることも知られているが、多くの言説において、人間の希望的思い込みで、強引にイルカが賢い特別な友達にファンタジックに仕立て上げられている感がある。欧米人には、「人間とイルカの神秘的な関係と、2つの種の間の説明不可能なつながり（‘the mysterious relationship between humans and dolphins and the unexplainable connection between our two species’, *Detroit News*, Aug. 7, 2009）」を信じたい気持ち強いようで、その思い込みこそがイルカ・イデオロギーを支えている。



また、イルカの知性を証明するために、次のような報道もなされる。

He (=O'Barry) notes that like humans and other great apes, they are self-aware (*National Post*, Aug. 7, 2009).

(オバリーは、人間や類人猿のように、イルカは自己認識をしていると言う。)

[W]hen she (= a dolphin O'Barry was looking after) died in his arms, he was convinced she'd committed suicide (*The Independent on Sunday*, Oct. 11, 2009).

(世話をしていたイルカが腕の中で死んだとき、オバリーは、そのイルカは自殺をしたのだと確信した。)

上記は、自己認識をしたり、自殺したりとイルカがかなり擬人化された言説である。イルカが音によるコミュニケーションをすることは事実らしいが、知能が高いと言えるかどうかは、実際には未だ証明されていない。そもそも、人間の知性をはかるのと同じ尺度でイルカを賢いか賢くないと言うのは、いかにも人間の価値観の押しつけのようにも取れる。イルカは高知能だという言説は、反イルカ漁を唱えるための、論拠の少ない強引な言説であると思われるが、この言説は、英文記事の論調ではかなりポピュラーである。また、確かにイルカはかわいらしく笑っているようにも見えるが、それは人間側の勝手な思い入れであるし、かわいいから食用にはしてはならないとする論理は、いかにも説得力を欠いた、価値観の押しつけの論理である。

#### 4.2.4. 科学言説

イルカ漁の野蛮さを強調する「植民地主義的言説」、環境保護のシンボルであるイルカを一頭も殺してはならないとする「エコロジー言説」、イルカはかわいく賢い人間の友達だから殺してはならないとする「「イルカ＝特別」言説」に続いて、「科学言説」もイルカ・イデオロギーの主張に多用される。ここで言う科学言説とは、イルカ肉が、水銀を大量に含んでおり、食用に適さないという主張であり、イルカ漁をやめさせるために科学的見解を持ち出した言説である。これまで扱った3つの言説が、感情的で根拠に欠ける主張であったのにたいして、科学言説は、客観性を装って健康問題に訴えるというやり方で、イルカ・イデオロギーを表出している。

Several studies have shown, including studies done by Japanese scientists, that dolphin and porpoise meat is contaminated with mercury, PCBs, DDT, and other contaminants at levels that are unsafe for human consumption. Several Taiji residents who regularly eat dolphin and whale meat have been tested for mercury contamination and levels have been found as high as 67.2 parts-per-million (ppm). . . Overall, the levels of mercury found in the 50 Taiji residents . . . were about 10 times higher than the

average in Japan (*PR Newswire*, Mar. 26, 2010).

(日本の科学者による研究を含む、いくつかの研究が、イルカ肉は、人間が食べるのに安全でないレベルの水銀やPCBやDDTやその他の汚染物質を含んでいることを明らかにした。頻繁にイルカ肉や鯨肉を食べる太地町の住民が水銀汚染についての検査を受けたところ、何人かから67.2ppmもの高い水銀値が検出された。概して、50人の太地町住民から検出された水銀レベルは、平均的日本人の10倍に達した。)

Analysis of dolphin meat shows it contains high levels of mercury. . . Dolphin meat from Taiji, taken from supermarket shelves, has been shown to contain levels of mercury up to 10 times higher than considered safe (*The Independent on Sunday*, Oct. 11, 2009).

(分析結果によると、イルカ肉は高いレベルの水銀を含んでいる。太地町のスーパーの棚にあったイルカ肉は、安全とされる基準の10倍もの水銀を含んでいた。)

上記のように、イルカ肉の水銀汚染がセンセーショナルに書き立てられ、「公衆衛生の悪夢の暴露、日本のゆるい食品基準 ('exposing a public health nightmare. . . Japan's lax food standards', *Tulsa World*, Nov. 13, 2009)」などと報道される。イルカ肉の販売は合法的なのに、「珍味として不法に売られている ('Some of the harvested meat is sold illegally as a food delicacy', *Toronto Star*, Aug. 7, 2009)」などと書かれている記事もある。さらに、次は、インタビュー記事の中で、シホヨス監督が述べた言葉である。

The health ministry's website encourages pregnant women to eat 80 grams of bottlenose dolphins every 60 days. It's unconscionable (*The Village Voice*, Mar. 25- Mar. 31, 2009).

(厚生労働省のホームページを見ると、妊婦にバンドウイルカの肉80グラムを60日ごとに食べるように薦めている。常識はずれだ。)

これは全くの誤報で、実際には厚労省のホームページには、バンドウイルカの肉は水銀を含んでいるため、妊婦は1回80グラムとして、2ヶ月に1回まで(1週間に10グラム程度)に摂食を抑えるようにとの注意がなされている。記者による記述ではなく、監督に語らせる形の報道とはいえ、このような誤報の流布が、世界の世論形成に与える影響は侮れないのではないだろうか。

また、映画スタッフが太地町で撮影しているうちに、水銀中毒になったとの記述もある。

They had to endure the very thing they were trying to protect others from: mercury exposure. "We all got really severe mercury poisoning," Hambleton (=a staff member) says. "Louie (=the director) did first. He was getting all kinds of headaches." Hambleton says he's experienced some memory loss as a

result of making the film and won't ever be able to eat tuna fish again (*McClatchy-Tribune Business News*, Jul. 24, 2009).

(撮影スタッフは、水銀の苦痛に耐えねばならなかった。彼らはまさにその水銀汚染から他人を守ろうとしていたのだ。「われわれは、ひどい水銀中毒になった。」スタッフのハンブルトンと言う。「最初は監督だった。彼はあらゆる種類の頭痛をかかえた。」ハンブルトンは、映画を作っているうちに、一部の記憶が抜け落ちる経験をし、二度とまぐろは食べられないと言っている。)

記事には、スタッフがどれくらいの期間、太地町にいて、何を食べたかなどの記述はない。頭痛や記憶喪失の原因はおそらくは不明にもかかわらず、一方的に太地町の高齢者(まぐろ?)の水銀が原因とされてしまっている。次の文脈には、これとは異なるパターンの不用意な結びつけが見られる。

Mercury poisoning is a sensitive topic in Japan, where a disorder now called Minamata Disease was linked to a chemical company that dumped tons of mercury compounds on a southern island (*Charleston Daily Mail*, May 10, 2010).

(水銀中毒は、日本では敏感な問題だ。現在、水俣病と呼ばれている病気の原因が、南日本で、化学会社が、何トンもの水銀化合物を垂れ流したと関連しているからだ。)

上記では、イルカ肉の水銀が、かつての水俣病のイメージと重なり合わされ、太地町のイルカ漁のネガティブなイメージが誇張される。

海の生態系の上位に属するイルカの肉が、マグロやカジキや鯨などと並んで水銀を他の魚より多く含んでいるのは事実である。しかし、イルカ・イデオロギーを形成する科学言説は、水銀の危険性をあおるだけで、客観性に欠けている。環境省国立水俣病総合研究センターが調査した所では、太地町の住民は、髪の毛に含まれる水銀レベルは高いが、水銀による健康被害の所見はなかったそうである。しかしながら、その結果を報道する際においても、「記者たちは、なぜそんなに高い水銀レベルなのに健康に影響しないのかと質問し、研究所の力量に疑問を呈した。('[M]any reporters questioned how there could be no health effects despite such high mercury levels, with some challenging the competency of the lab', *Telegraph-Herald*, May 10, 2010)」と述べていたり、WHOの科学者に「水銀の被害はすぐには出ないのです。('[S]he said that some damage from mercury might not appear immediately', *ibid.*)」などと言わせたりしており、どうしてもイルカ肉と水銀の健康被害を問題にしたいという意図が見て取れる。

## 5. まとめ

これまでの、映画「ザ・コーヴ」についての英文の新聞・雑誌記事の分析で分かったことを

まとめると、次のようになる。英文の新聞・雑誌の大半の記事の言説において、映画が主張する「イルカ=かわいい=特別=殺すべきではない=食べるべきではない」とするイルカ・イデオロギーが表出されていた。イルカ・イデオロギーを支持する言説の特徴を詳しく見てみると、主に、1、イルカ漁の野蛮さを強調する「植民地主義的言説」、2、環境保護のシンボルであるイルカを一頭も殺してはならないとする「エコロジー言説」、3、イルカはかわいく賢い人間の友達だから殺してはならないとする「[イルカ=特別]言説」、4、イルカ肉が、水銀を大量に含んでおり、食用に適さないという主張をする「科学言説」の4種類の言説が抽出された。そして、イルカ・イデオロギーを支持するそれぞれの記事においては、これらの4種類の言説が1つ、あるいは複数組み合わせられて、イルカ漁とイルカ食を断罪する主張がなされ、価値観の植民地主義の行為を正当化する論拠とされている。しかし、上記で分析したように、これらの4種類の言説は、全てが正当な根拠を欠く、客観性に欠ける主張であり、そこには、欧米の価値観を唯一の正義と信じ、他の価値観を認めようとしないうる欧米中心主義が見て取れ、異文化に対する寛容な態度は見られない。また、故意か間違いかは不明であるが、イルカ漁とイルカ食のネガティブなイメージ作りに影響すると思われるような誤報も何種類かある事が分かった。

われわれは、このような偏向した報道が、他ならぬ英語のメディアによって行われている事の重大性を重視しなければならぬだろう。なぜなら、今や英語は世界で最も流通する言語であり、国際世論の形成における英語メディアの論調の影響は決して看過できるものではないだろうからだ。欧米の価値観が世界を席卷するグローバル化の流れの中では、欧米人にとっては、日本の一地方にすぎない太地町のローカルなニーズなど無視してもよいものにとらえられているのかもしれない。しかし、太地町のイルカ漁は、確かにその地域の文化的必然性を持って存在しているのである。本論文では、20世紀半ばから現在に至る捕鯨国と反捕鯨国の対立の経緯と歴史にそれほど詳しく触れることはできなかったが、捕鯨やイルカ漁をめぐる欧米の反捕鯨国と、捕鯨国である日本の価値観の対立はかなり根深い問題である。そこには、生き物を食べることに對するキリスト教的思想と仏教的思想の違いも絡んできており、問題をさらに複雑化させているようにも見える。

イルカ漁を「野蛮だ」、「倫理に反する」と野生動物に対する善意を振りかざして責め立ててくる欧米に対して、その無知と傲慢さに不快感を表しながら、「これは日本の文化だから口を出さないでほしい」という態度で深い議論を拒否しているだけでは、おそらく今後いつまでたっても互いが理解し合えることはないだろう。であるならば、太地町は、あるいは日本側は、イルカ漁を海外メディアから遠ざけるのではなく、あえてその必要性を言葉を尽くして説明し、異なった文化や価値観を持つ人々ときめ細かなコミュニケーションを取って行く必要があるだろう。日本側が適切な反論をしていかないと、映画の主張が科学的で正しいから、日本側は反論ができないのだという誤解すら与えてしまいかねない。記事を分析する中で、日本のある地域ではなぜイルカを獲るのか、獲らなければならないのかということや、「殺生」に対しての日本人の考え方など、今後、欧米に向けてもっと発信していかなければならないと思われた課

題は多い。また、イルカ食を行っている地域の住民の健康への水銀の影響についても、欧米に不必要な疑念を抱かれないような方法で調査を行い、情報を公開していく必要があるだろう。理解し合うのが困難なほど価値観が異なっている相手と、苦しみながら少しでも妥協点を見いだしていく作業は、今後ともグローバル化時代の異文化コミュニケーションにつきものになってくるであろう。価値観の植民地主義に正当に対抗するためには、攻められる側も、正しい言葉と情報で武装していく他はない。

## 引用記事一覧

- 'Activism on the movie screen: Japan sees bloody dolphin hunt', by Hiroko Tabuchi, *International Herald Tribune*, Paris: Oct.23, 2009.
- 'Dolphin hunt leads Aussie town to cut ties with Taiji in Japan', anonymous, *Jiji Press English News Service*, Tokyo: Aug. 27, 2009.
- 'The Cove' fishes for answers, and justice: Environmental documentary rivals the best thrillers', by Colin Covert, *Star Tribune*, Minneapolis, Minn.: Aug. 7, 2009.
- 'The Cove', by Michael Smith, *Tulsa World*, Tulsa, Okla.: Nov. 13, 2009.
- 'Dead in the water: Hard to watch; Guerilla filmmaking at its best, The Cove shows the carnage behind the demand for dolphins to feed and entertain us', by Peter Howell, *Toronto Star*, Toronto, Ont.: Aug. 7, 2009.
- 'Cinematic fury of a dolphin fan', by Justin Chang Variety, *South Florida Sun-Sentinel*, Fort Lauderdale, Fla.: Aug. 7, 2009.
- 'Dolphins slaughtered in "The Cove"', anonymous, *The Patriot Ledger*, Quincy, Mass.: Aug. 7, 2009.
- 'Japan must halt this evil bloodbath', anonymous, *The Daily News*, Durban: Sep. 22, 2009.
- 'Shining light on Flipper's Fight; 'The Cove' aims to show brutality of dolphin fishing', by Philip Kennicott, *The Washington Post*, Washington, D. C.: Aug. 7, 2009.
- 'The Cove' exposes slaughter of dolphins', by Adam Graham, *Detroit News*, Detroit, Mich.: Aug. 7, 2009.
- 'The Cove movie exposes mercury poisoning risk', anonymous, *PR Newswire*, New York: Dec. 16, 2009.
- 'The Cove': Graphic shots of dolphin slaughter make you angry', Robert Horton, *The Herald*, Everett, Wash.: Aug. 7, 2009.
- 'Fine film has sense of porpoise', anonymous, *New York Post*, New York, N. Y.: Jul. 31, 2009.
- 'Morgenstern on film', by Joe Morgenstern, *Wall Street Journal* (Eastern edition), New York, N. Y.: Jul. 31, 2009.
- 'Free Willy. Seriously', by Ella Taylor, *The Village Voice*, New York: Jul. 29-Aug. 4, 2009.
- 'Cove' shines light on our relationship with dolphins', by Gary Wolcott, *Tri-City Herald*, Pasco, Wash.: Aug. 28, 2009.
- 'Family films by Michael Booth: "Cove" is tough to watch, but educational for kids', by Michael Booth, *Denver Post*, Denver, Colo.: Jan. 8, 2010.
- 'The grooming of an ingenue', by Nigel Andrews, *Financial Times*, London (U. K.): Oct. 29, 2009.
- 'Star of the dolphin-hunt film wants to win over Japan', by Yuri Kageyama, *The Observer*, Gladstone, Qld.: Sep. 5, 2009.

- 'Japanese town slams 'The Cove' Oscar win', anonymous, *McClatchy-Tribune News Service*, Washington: Mar. 8, 2010.
- 'Movie review; Exposing ugly secrets; Makers of "The Cove" surreptitiously capture a Japanese town's gruesome practice of slaughtering dolphins', by Kenneth Turan, *Los Angeles Times*, Los Angeles, Calif.: Jul. 31, 2009.
- 'Secret slaughter of the dolphins: Captured 'Flippers' sealife parks don't need meet end in bloody cove (Eire Region)', by Ben Jackson, *The Sun*, London (U. K.): Sep. 5, 2009.
- 'OKC events: August 10, 2009', by Joan Gilmore, *Journal Record*, Oklahoma City, Okla.: Aug. 10, 2009.
- 'Switch on', anonymous, *South Wales Echo*, Cardiff (U. K.): Jan. 2, 2010.
- 'Prize-winning film has lofty goal of saving dolphins', by Larry D. Curtis, *Deseret News*, Salt Lake City, Utah: Jan. 25, 2009.
- 'For the love of Flipper – Dolphin hunts exposed in docu', by Reed Tucker, *New York Post*, New York, N. Y.: Jul. 26, 2009.
- 'A not-so-cute reality about dolphins: A new documentary, The Cove, exposes the annual slaughter of thousands of the mammals in Japan', by Steve Persall, *St. Petersburg Times*, St. Petersburg, Fla.: Aug. 9, 2009.
- 'Documentary The Cove seeks to save the dolphins: Cove: Be prepared to be outraged by scenes of carnage', by Amy Biancolli, *Houston Chronicle*, Houston, Tex.: Aug. 7, 2009.
- 'Dolphin drama', by Carol Cling, *Las Vegas Review-Journal*, Las Vegas, Nev.: Oct. 23, 2009.
- 'Captured on film: Dolphin bloodbath Japan tries to hide', anonymous, *The Independent on Sunday*, London (U. K.): Aug. 30, 2009.
- 'Now you see it, Now you don't', by Andrew Johnson, *The Independent on Sunday*, London (U. K.): Oct. 11, 2009.
- 'Lisa Wathne: What marine mammal parks don't want you to know', by Lisa Wathne, *San Gabriel Valley Tribune*, West Virginia, Calif.: Aug. 24, 2009.
- 'A cloak-and-dagger film of dolphin slaughter: Clandestine filming of dolphin slaughter in Japan', by Jeannette Catsoulis, *International Herald Tribune*, Paris: Aug. 5, 2009.
- 'DVD Picks', by Glenn McDonald, *News & Observer*, Raleigh, N. C.: Dec. 11, 2009.
- 'OKC events: February 17, 2010', by Joan Gilmore, *Journal Record*, Oklahoma City, Okla.: Feb. 17, 2010.
- '"The Cove" offers a chilling look at dolphins' trade and slaughter', by Lisa Kennedy, *Denver Post*, Denver, Colo.: Aug. 7, 2009.
- 'Hunting Flipper', by copper, *Orlando Sentinel*, Orlando, Fla.: Nov. 3, 2009.
- 'Film reviews: Other releases', by Siobhan Synnot, *Scotland on Sunday*, Edinburgh (U. K.): Oct. 18, 2009.
- '"The Cove" lifts the veil on Japan's dolphin shame', by Roger Moore, *Orlando Sentinel*, Orlando, Fla.: Aug. 7, 2009.
- 'It was good to read in the Cape Times (March 9) that the documentary The Cove, highlighting Japan's annual brutal kill of dolphins in Taiji, had received an Oscar', anonymous, *Cape Times*, Cape Town: Mar. 11, 2010.
- 'Doco bid to save dolphins', anonymous, *The Gold Coast Bulletin*, Southport, Qld.: Aug. 1, 2009.
- 'How Flipper led me to The Cove: Ric O'Barry used to train dolphins. Then one 'killed itself' and his life changed, says Jacqui Goddard', by Jacqui Goddard, *The Times*, London (U. K.): Oct. 16, 2009.

- ‘It’s a revenge movie’: Louie Psihoyos and Richard O’Barry find purpose with porpoises’, by Chris Knight, *National Post*, Don Mills, Ont.: Aug. 7, 2009.
- ‘Heroes’ Star Hayden Panettiere takes her Save the Whales Again! campaign on the road in Japan: Trip includes return to the notorious dolphin-hunting village of Taiji, which was recently featured in the Oscar-winning ‘The Cove’, anonymous, *PR Newswire*, New York: Mar. 26, 2010.
- ‘The activist’, by John Anderson, *The Village Voice*, New York: Mar. 25-Mar. 31, 2009.
- ‘‘The Cove’ movie from Boulder-based photographer investigates dolphin slaughter (video): Boulder-made documentary gets nationwide distribution after Sundance success’, by Vince Darcangelo, *McClatchy-Tribune Business News*, Washington: Jul. 24, 2009.
- ‘Mercury levels high in dolphin-hunting town’, by Jay Alabaster, *Charleston Daily Mail*, Charleston, W. V.: May 10, 2010.
- ‘Study: High mercury levels in ‘The Cove’ town’, by Jay Alabaster, *Telegraph-Herald*, Dubuque, Iowa: May 10, 2010.

## 参考文献

- 大隅清治 (2003) 『クジラと日本人』 東京：岩波新書.
- 梅崎義人 (2000) 『動物保護運動の虚像—その源流と真の狙い— (改訂版)』 東京：成山堂書店.
- 小松正之 (2002) 『クジラと日本人：食べてこそ共存できる人間と海の関係』 東京：青春出版社.
- 丹野大 (2004) 『反捕鯨？：日本にクジラを捕るなという人々 (アメリカ人)』 東京：文真堂.
- 浜野喬士 (2009) 『エコ・テロリズム：過激化する環境運動とアメリカの内なるテロ』 東京：洋泉社.
- 三浦淳 (2009) 『鯨とイルカの文化政治学』 東京：洋泉社.
- Bailey, R. W. (1991), *Images of English: A Cultural History of the Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Macaulay, T. B. (1835), ‘Indian Education: Minute of the 2<sup>nd</sup> of February, 1835’ in *Macaulay: Prose and Poetry* (1952), selected by G. M. Young, London: Rupert Hart-Davis.
- Mizokami, Yuki (2001), ‘How was the ‘English as the World Language’ Discourse Been Constructed?: Revealing the deceptions of the ‘common-sense’ Discourse’, *Bulletin of Aichi Konan College*, no.30.
- Mizokami, Yuki (2002), ‘Re-marking the Boundaries: Towards subversion of the mechanism of Discourses producing and reproducing social discrimination’, unpublished Ph.D.dissertation, Nagoya University.